

甲状腺外科草子 12

『書く力』 -アガワ家の人々-

杉野 圭三

「憲法と平和」の特集で原稿依頼を受けましたが、観念的な空虚な言葉を羅列されても、読まされる人間には苦痛以外の何物でもありません。以下の3冊の本について述べることで、代用させていただきます。

1. 雲の墓標：阿川弘之著

中学時代に読んでいただきたい推薦図書です。手元にある新潮文庫の『雲の墓標』は昭和42年発行の第14刷で、中学2年の時に読んだ本です。本を読むにも、時候と同様に「旬」があります。年少すぎて理解できないこともありますし、年長すぎても感性が鈍り共感できないこともあります。多感な中学時代にこの本に出会えたことは幸せでした。



雲の墓標 14刷 (1967, 100円)、同 80刷 (2015年, 520円)

阿川弘之氏は広島県名誉県民で「暗い波濤」など数多くの著書があり、文芸春秋の巻頭随筆を長年執筆されてきました。この本は、初期の特筆すべき名著です。

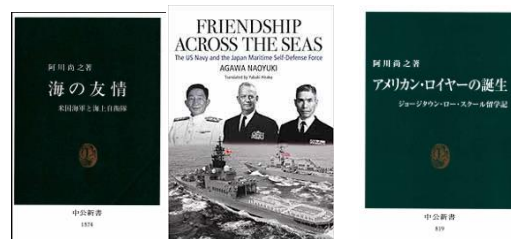
昭和18年、平穏無事な大学生活から学徒兵として海軍航空隊に入った吉野次郎海軍少尉を通して、若者たちの訓練の日々が綴られています。読むにしたがい、戦時中の世界に引き込まれるような迫真の描写で、元海軍士官「阿川大尉」でなければ、書くことのできない小説です。エーリッヒ・レマルク(1898-1970)の『西部戦線異状なし』も従軍した若者を描いた有名な小説ですが、

それ以上の高い評価ができる小説です。

この本を読んだ人は、「感想文を書け」と言われても、空々しい言葉を述べたくないでしょう。ただ、生きていることと平和の有難さが実感できることは確かです。

2. 海の友情：阿川尚之著

防衛大学の推薦図書の一つです。阿川尚之氏は弘之氏の長男で、アメリカの弁護士資格も取得した慶応大学教授です(詳細は「アメリカン・ロイヤーの誕生」をご覧ください、この本もお勧めです)。終戦後、敵味方同士であったアメリカ海軍と旧日本海軍の軍人が心を開いて協力関係を築き、海上自衛隊を発足させる過程が様々な秘話を交えて描かれています。



海の友情 (中公新書、2001) 同英語版、

戦時中の勇猛果敢な駆逐隊指揮から「31ノット・バーク」と異名をとるアーレイ・バーク提督(1901-1996)は日本人を公然とジャップと呼ぶほど日本人嫌いでした。彼は如何にして親日家に変貌をとげていったのでしょうか? 提督は朝鮮戦争勃発とともに日本に赴任し、極東米海軍参謀副長として、仁川・元山上陸作戦に関与します。

当時、米海軍の掃海能力は低下し、やむを得ず元日本帝国海軍掃海部隊の協力を仰ぐこととなりました。このような過程で彼は野村吉三郎元海軍大将(元駐米大使)、草鹿仁一元海軍中将たちと徐々に親交を深めることとなります。

文中のエピソードを紹介します。

ある日、提督は滞在するホテルの部屋が殺伐としていたため、自分で花を買って飾りました。何日かすると、部屋の花が新し

いもの変わっていることに気づきます。ホテルの配慮かと思って支配人に礼を言うと、ホテルのサービスではないとのことでした。実は、これらの花は客室係の女性（戦争未亡人だったそうです）が自分のポケットマネーで購入し、飾っていたものだったのです。

1951年12月、バーク提督は朝鮮戦争休戦交渉のため、羽田飛行場を午前二時出発し、ワシントンに向かうこととなりました。深夜のため空港には誰も見送りに来ませんでした。しかし、バーク自身驚いたことに、午前一時半に野村提督が姿を現しました。当時、74歳の野村提督は都電と鉄道を乗り継いで、最後は数マイルの距離を徒歩で見送りにきたのです。

このような、思いやり、気配り、優しさに接して、次第に日本人を見る目が変わっていったのです。口先だけで、「友愛」、「平和」、「友好」などを唱える「自称ハト派」の政治家に爪の垢でも煎じて飲んでもらいたいぐらいです。

また、機雷掃海任務において旧日本海軍軍人の技術力、信頼性が高く評価されたことはもちろんのことです。昨日までの敵も友軍として一緒に働いてみると、「これほど信頼できるパートナーは無い」と高く評価され、海上自衛隊創設の大きな原動力となったのです。これらの功績でバーク提督に勲一等旭日大綬章が贈られています。

提督の葬儀では、アーレイ・バーク級イージス艦と提督が昔指揮した第23駆逐隊群の全艦は31ノットで5分間航走しました。生前、諸外国からも数多くの勲章を受けた提督の胸に最後に飾られたのは、本人の意思で勲一等旭日大綬章だけでした。

3. 聞く力： 阿川佐和子著

カミサンの推薦図書です。ご存じ、大ベストセラーとなった本です。書店の平積み

になった本をペラペラめくり、まえがきを読んだ途端に引き込まれ、すぐにレジに走りました。さすが、アガワ家の血筋です。インタビューの失敗談や様々な抱腹絶倒な逸話が満載です。城山三郎氏やモーガン・フリーマン氏とのインタビューは、人と人との交流、接し方がいかに重要であることを示し、両氏の性格が如実に現れています。

しかし、ジュリー・アンドリュース本人の面前で彼女の持ち歌を独唱する度胸には脱帽です。



無数のインタビューをこなされただけに重要な指摘が数多くあります。いつも3分間診療で、患者さんと視線も合わさず、ひたすらパソコン画面と格闘し、会話の腰もサバ折りの如くへし折る毎日を反省せずにはおられません。きっと明日からの診療に役立つものと思います。

サワコ女史は小生と同年代で、『走って、ころんで、さあ大変』以来の愛読者です。父・弘之氏から文章について、手厳しい指導があったそうですが（最初の随筆「笑ってケツカッチン」の巻末に弘之氏の解説がありますが傑作です）、これまでの著書を拝読したところ、サワコ女史の『書く力』は、父君や兄君と同様に卓越しており、『聞く力』以上でしょう。

家庭平和を維持するためには、目と目を合わせてカミサンの話を忍耐強く『聞く力』を磨く必要があります。

広島市医師会だより、Vol.568, 62-63.2013, 「憲法と平和」特集への掲載内容を一部改変しました。

（一甲状腺外科医の徒然なる随想）

2021年12月22日